

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第489号 2022年12月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## ご縁は楽しい

塚田 博教

このテーマは最近しみじみ思っていることです。

私は大阪の箕面市にある教学寺という貧乏寺で住職をしておりまして。ところが、今はそのかたわら、三つの学校と病院と児童養護施設でもご縁をいただいております。それが不思議でたまらないのです。

実は、これらは全て縁ができた他人からの紹介です。昔の私を知る人間なら信じられないと言うでしょう。そんな状況なのです。

不思議といえば、寺が貧乏だったという事実が、お寺以外の世界を知るきっかけになったりするのです。血縁ではありませんが、うちからはカルピスの創業者も出ています。

更に、私は親や学校の先生の言うことを本当に聞かなかつた子でした。故に、学校での成績は常に下の下の下。なぜ自分の人生を押しつけられたり、嫌な勉強をさせられなければいけないのか、常に憤りを感じていました。

今、自身が親になり教員になって、本当に恥ずかしい思いでいっぱいです。いくら反省しても反省し尽くせない人生を歩んできましたから。

しかし、人生はどこでどのようにならるかわかりません。校内暴力・浪人・バイク事故で初めて自分と向き合いました。全てを他人のせいにして、世の中を恨み、自分を憐憫していた自身に対して、

本当にこれで良いのかと問い続けていました。

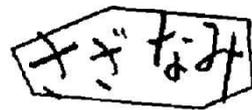
答えは初めから決まっています。「絶対に嫌だ」。自分に残っていたのは、沢山の失敗と屈辱感。そして、もう下はないという覚悟でした。そして、これが自分の大きな財産であるということに気づかされていくのです。

うちは浄土真宗のお寺です。他力本願をむねとする宗派です。救われがたき者こそ阿弥陀如来の目当てであると信じている宗派です。

まさに私のことでした。別に好きで親や先生に反抗していた訳でも、好きで勉強しなかつた訳でもなかつたことを思い出したとき、自身の凍り付いていた心が溶け始めました。それと同時に、よき師・よき先輩・よき朋が次々に現れて、私を導いてくれました。それは本当に不思議で楽しい体験でした。

どんなに素晴らしいご縁でも、心を閉ざしては気づけません。私の場合は、様々な失敗や回り道が心を導いてくれたのかも知れません。コロナ禍をきっかけに、自坊のインスタを始めました。毎日、100文字の法語もどきをアップしたら、フォロワーさんが2500人以上。ご縁は本当に不思議で楽しいな。

(京都女子大学附属小学校 宗教科 非常勤講師)



▼石室の壁画が国宝に指定され高松塚古墳やキトラ古墳をはじめ歴史的な文化遺産が至る所に存在する明日香村は、「日本の国の始まり」と言われています。その明日香村では、平成31年度から、幼小中を一つの明日香村コミュニケーションスクールとして施設分離型の一貫教育をすすめてこられ、令和4年11月に「明日香村幼小中一貫教育実践発表会」を開催されました▼取り組みの第1ステージでは学校教育・家庭教育・地域教育の3つの柱を、推進の土台として体制の構築。第2ステージは15歳において自己確立できる教育の内容・体制・組織を整え、第3ステージは、「日々の教育実践」の充実と発展に努められました。推進プロジェクトは「基礎的な言語力部会」「郷土学習部会」「英語教育部会」「中期・専門部会」及び合同研修会を積み上げの成果を公開保育や公開業においてをされました▼参観した授業は「基礎的な言語力部会」の1年生と4年生の国語科。幼稚園の繋がりを大事にして1年の授業は書く活動が中心でした。中学生の学びを見通し、書く活動を書いた文を対話に結びつけた4年の授業。それぞれの授業における意欲的に学び合う子どもの姿と学びの深さが印象的でした。▼12年間を「プレ期・前期・中期・後期」の4期としてなめらかな自己成長を促す研究の成果を保育や授業、及び、幼児・児童・生徒の皆さんの姿から学びました。(吉永幸司)

家庭学習ノート  
弓削 裕之

2年生の子から提出される「家庭学習ノート」が、とても充実している。漢字の学習や計算練習、日記、書き写し、調べ学習など、いろいろな内容でノートが埋まっている。

授業の中で、子どもたちから疑問が出る時がある。例えば、『お手紙』(光村二下)の学習の際、「アーノルドローベルさんってどんな人ですか。」とつぶやきがあった。「どんな人なのでしょうね。」と返して終わると、次の週には、「Aさんが、家庭学習ノートにアーノルドローベルについて調べたことを書いてきた。」

お母さんが図書館でアーノルドローベルの本をかりて来ました。がまくんとかえるくんはローベルさん自身の考えやせいかくをもとに作ったキャラクターで、アメリカのパーマント州で夏休みをアソビしている時にむすめのエイドリアンがまがかけでできたそうです。(中略)(ローベルは)自分の家のリビングでお話を入りのいすにすわってノートにお話を書きました。文をよりよくするために大声で音読をしたそうです。

本を借りて来たのは、お母さん。Aさんのおうちで、国語の授業のことが話題に上がったのだから。家庭学習ノートには、必ずおうちの人の姿が見える。お手本、字、算数のオリジナル文章題、あったかいコメント。ノートが、おうちのひとりの三人三脚で進んでい

ることがよくわかる。

アーノルドローベルのことは授業で話題になった内容なので、本人の了承を得てクラスのみならず紹介した。こうして出てきた疑問の全てを、子どもたちが家庭学習ノートに調べてくるようになった。「挿絵のポストに書いてある『SD』ってどういう意味」「かえるとがまがえるってどう違うの」…。みんなでも共有すればするほど、また別の疑問が出てきて、その度に『お手紙』の世界が広がり深まっていった。

家庭学習ノートがクラスに幸せをくれるのは、調べ学習だけではない。ある日、Bさんがノートにこんな日記を書いてきた。

わたしが、学校で、お友だちのいいところを見つけたので、書き時けんかをした。Cさんが、わたしが泣いていたら、ろう下で「ごめんね。」と言って、教室に帰ってきてティッシュを一まいくれまいた。それで、スモックをきれいに入れたんで、赤白帽子をロツカいさしは、みんなの知っているやさしさより、100倍やさしいので、みんなに教えてあげたいです。

「自分しか知らないCさんの優しさ」について綴ってくれたBさん。すぐにBさんの家に電話をし、おうちのひとりに、素敵な日記をありがとうごさいますと伝えました。次の日、クラスの人みんなに紹介すると、BさんとCさんに向けて拍手が起こった。

(京都女子大学附属小学校)

「菜の花が

しあはせさうに

黄色して」

少徳 信

ある朝、クラスの男の子がノートを持って話しかけてきた。

「おれな、自主学習で俳句調べてきてん」

「おお! いいやん。どんな句を調べてきたん?」

ノートを見ると、芭蕉から現代の作家まで、ずらりと30句ほど並んでいた。

「頑張って調べてきたなあ。ちなみに、どの句がおすすめなん?」

「一番最初にいいなって思ったのは、水原秋櫻子。『滝落ちて群青世界轟けり』の群青世界ってなんやろって思って調べたら、この人が作った言葉で、滝の水しぶきのことを表しているみたい。確かに、滝の水しぶきってとんでもなくらいの量やし、それを群青世界って表現したのがかっこいいなって思った。後は、飯田蛇笏。『芋の露連山影を正しうす』も初めは意味わからなかったけど、解説を読んだらなるほどと思った。春とか夏の朝とは違う、冷えた空気がとても伝わってきた。」

調べる中で、自分の感覚と対話しながら考えられただけでも立派だと思ったが、本人が最も感動したのはもつと別の句であった。

「でもな先生、おれ的に一番覚えしてるのは、細見綾子の『菜の花がしあはせさうに黄色して』。おれ

さ、自分で俳句を作る時もどっちかって言ったら難しい言葉とかかっこいい表現とかを使いたがるねんな。だから今までもそういう句が好きになることが多かったん。でもさ、この句ってさ、特に難しい言葉を使っているわけではないのになんか一番心に残ったんよな。なんでやろうな。」

「なんでやろうな。ちなみに、この句のどこがそんなに魅力的やったん?」

「やっぱり『しあはせさうに黄色して』かなあ。黄色って確かに明るい色やなとは思ってたけど、幸せそうとまでは思ってたことない。でもな、この句見るとなんか幸せな感じがすつと入ってくるんよな。黄色って幸せの色やなつてめっちゃ納得したんよなあ」

新しい言葉を学ぶということ、新しい単語を学ぶということだけではない。既知の言葉の意味や感じ方が広がる時、新しい言葉に出会った時のような感動を覚える。この男の子はまさしく、「黄色」という言葉を新しく得たに等しい体験をしたのだから。だからこそ彼の印象に強く残ったのだろうと考えた。

この会話を通して、子どもたちには、単に言葉を多く知っているという語彙力ではなく、一つの言葉からたくさん感じられる力を身につけてほしいと思った。言葉を通して、子どもたちを育てるよう

にこれからも努力していこうと思

(彦根市立河瀬小学校)

**ウエビングマップを  
活用した「モチモチの木」  
高木 富也**

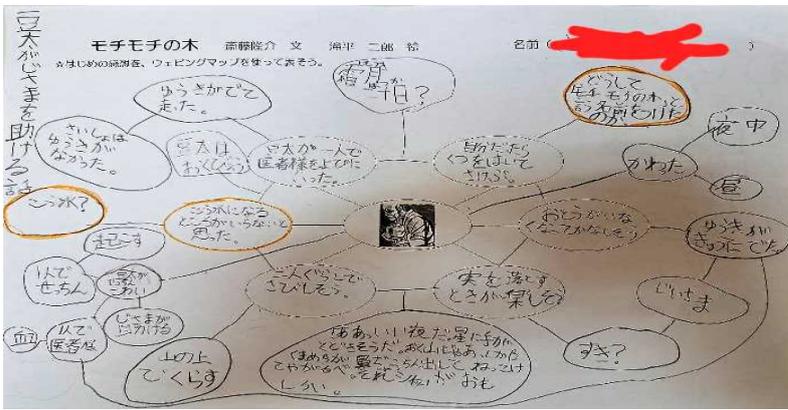
前回の機関誌及び10月例会では、昨年度の『「ごんぎつね」実践を提案した。物語とシンキングツールの可能性についてはもちろん、学びの下支えとなる全文提示や指導のポイントについて学ぶことができた。それらを踏まえ、今回は3年生『モチモチの木』において、ウエビングマップを用いた実践を提案する。

第一次では、思い切ってウエビングマップを用いて初読の感想を書いた。キーワード化することで、自分の疑問をたくさん出すことが見られた。ウエビングマップを基に交流しながら、「なぜ夜中に一人で医者様を呼びに行けたのか?」「なぜまたおくびようにもどるのか?」などを学級の問いと設定し、学習を進めた。

第二次では、問いの解決を進めていく。全文提示によって、場面読みではなく、場面を横断しながら根拠を探し、つなげ、考えを広げていった。また、付箋に疑問や考えを短くまとめ、全文提示に貼りに行くという活動は、児童の「もつとやりたい!」という姿につながった。第二次後半では、「豆太」としての問い、ウエビングマップを用いて自分の考えを視覚化した。書くことが極端に苦手な児童や支援を要する児童にとって、短いキーワードで良いこと、形式に自由度があるウエビングマップは、非常に学習参加しやすいツールであった。また、ウエビングマップを班で話し読みする中で、キーボードの共通点や、考えの広がりの違いに気づき、自然と加

筆、修正、交流する姿が見られた。これらの活動を通して、豆太がたくさんのこわさを抱きながらも乗り越えた「特別な勇氣」を持つことができた、と学んだ。

『「ごんぎつね」ウエビングマップのシンキングツール活用、その効果に手応えを感じている。今後はより効果的に活用するための要件などについて着目して研究を進めたい。』  
(東近江市立能登川南小学校)



- ここは、よく分かるなあ。
  - 人物に質問してみたいな、
  - どうして、(人物は)こんなことを言ったのかな。
  - どうして、(人物は)こんなことをしたのかな。
  - じっくり考えてみたいな。くわしく知りたいな、
  - 他の友達の意見を聞いてみたいな。
- 二、学習に必要な「問い」を選択する場の設定・情報の開示  
個人で「問い」を生み出した後、付箋に書き出してグループで整理する時間を設定した。整理の視点として出された単元を貫く「問

**豆太はどんな子?  
人物の性格について  
「問い」持って読む  
谷口 映介**

学習名「豆太はどんな子? 斎藤隆介作品について話し合おう」  
「モチモチの木」東京書籍三年下)での実践を報告する。本学習の目標は出来事や場面の移り変わりに着目しながら、中心人物「豆太」の様子や気持ち、性格を読み、その変容を捉えることである。その際、探究を生み出す為に、学習者から文章に対する「問い」を引き出すことを大切にしたい。手立ては大きくは次の二つである。

一、指導者の言葉かけの改善

- じさまのはらいたがなあったら、なぜまた、せつちんにじさまと行くようになったの?(Aさん)
  - 最初に書いてある通り、やっぱり、モチモチの木がこわいから、じさまに甘えているのだと思う。
  - じさまも最後の言葉で、「やさしさ」か「勇氣」があると認められているし、怖くても医者様を呼びに行けたから、完全におくびようではないと思う。
  - ..しよんべんに一人で行く勇氣とは違う。人を助けるために出る勇氣だと思う。
- 学習者の「問い」は、教師の発問に代わるものだと考える。今後、も学習者の「問い」を学習に組み込む方法を問い続けたい。  
(竜王町立竜王小学校)

子どもから始めよう

西村 嘉人

ここ数年、年に一度の寄稿が、国語教育に関する内容から離れるばかりで、専ら近況報告に終始している。非常に心苦しく思っているのだが、とにかく書く材料がないのでお許しいただきたい。

さて、今年度は七月下旬から「保幼小の架け橋プログラムに関する調査研究事業」の指定小学校区のコーディネーターを務めている。保幼小の接続に関する調査研究である。四半世紀以上昔にたった一度担任した一年生の子どものための「学びの育ち」の記憶が、その後の教師人生の宝物になったことを思い出し、この仕事を喜んで引き受けた。

主な業務は保育園、こども園。幼稚園を訪問し五歳児クラスの保育内容や生活ぶりを観察し、一年生のスタートカリキュラムを小学校の先生方と一緒に開発していくというものである。七月からの雇用スタートであったので、全体構想も共有できないまま走っている、というのが現状である。

小学校の先生方と「架け橋プログラム」の接続カリキュラムを考えていくうえで確認したことは、「園での育ちを受け止めた小学校教育のスタートカリキュラム」を作ることである。多くの保育園や幼稚園

園から子どもと受け入れられる小学校では、各園での育ちをあまり受け止めることなく「まあまあこれくらいはできる」程度の理解でほぼ「ゼロスタート」であったように記憶している。わたしはずっとこのことが気になって仕方がなかった。入学してきた子どもたちがエネルギーを持って余している場面をしばしば目にしてきたからである。事業のスタートに当たって一番の願いだけはどうしても伝えなかった。

九月からは、保育園、幼稚園、こども園、小学校の訪問を始めた。時期的に「運動会」に向けての練習場面をどこの校園でも参観することが多くなった。驚きは練習風景の違いである。小学校の練習は「きっちりできるようになる」ための繰り返しである。園では、「楽しい遊び」だからダンスや走りを取り返すのである。「もつともつと」を園では子どもが、小学校では先生が言うのである。表情は五歳児の方が圧倒的に輝いている。保育園や幼稚園では「子どもがしたくなる」ことを大事にされている。小学校ももちろん「子どもがしたくなる」ことは大事にしているのだから、それ以上に「ここまでの出来栄え」の評価が大事にされているように感じた。この違いが、「もつともつと〇〇したい」

の子どものエネルギーの違いとなって表れたのではないかと考えるようになった。

園の発表会と小学校の音楽界の練習でも同じような違いを感じた。「劇遊び」「歌遊び」が発表会につながっていく五歳児と、「音楽」の学習発表として「きちんと表現する」ことを求められる一年生では練習に向かう勢いがずいぶん違った。自分がずっと関わってきた小学校教育を否定するばかりで申し訳ない気がするが、「何が」足りないのか見直してみる必要があるのではないだろうか。

小学校教育では、教科カリキュラムに基づいて日々の教育が推進される。わたしが訪問する一年生教室でも先生は教科書を手に指導内容を一生懸命子どもたちに教えておられる。指導書を傍らに置き「何をここでは押さえないければならないか」を確かめ、一時間一時間丁寧に指導されている。

では、子どもたちの表情はどうか。あまり輝かないのである。「うたくなる」モチベーションがなく「もつと〇〇したい」エネルギーも子どもたちから溢れ出てこないのがある。「たくなる」モチベーションも「もつと〇〇したい」エネルギーも子どもを見て初めてわかることである。

「子どもから始めよう」、今年度、保育園、幼稚園、こども園の保育参観で学んだことである。授業ができない今の自分が少し残念である。

編集後記

▲十一月例会(第四八八回)は、彦根市を

会場として「第八回近江の国語実践研究会」を、研究テーマ「私のめざす新しい国語学習」で開催しました。さざなみ国語教室同人だけでなく広く先生方の参加を頂くことができました。研究会は、基調講話を森邦博(京都女子大学非常勤講師)が担当し、実践提案①は「提案者」川端大介(守山市立立入が丘小)、「研究協力者」海東貴利(高島市立安曇小)で、実践提案②を「提案者」川部長人(東近江市立能登川南小)、「研究協力者」北川雅士(彦根市立城陽小)で行い、研究会の総括を杉澤周一(東近江市学力向上支援員)がそれぞれ担当。

▼川端さんは教材文「くじらぐも」(一年)を音読活動を通して読むという国語学習作りへの挑戦を報告。▼川部さんは「注文の多い料理店」(五年)を子ども「問い」をもとに、その「解」を子ども自身を作り出すプロセスの国語学習作りへの挑戦を報告。両提案ともに詳細な授業記録があり、子どもの姿をもとにした協議が深まりました。また、グループでの交流の場を持ち、参加者全員の発言を確保するように工夫をしました。少数で輪になって実践提案と自分の授業の実態をつなげて考えを出し合ったり、日々の国語学習作りの悩みや工夫を語り合いました。互いの実践の交流を通じて新しい国語学習の目標を共有することができたように思います。▼巻頭には、塚田博教先生から玉稿をいただきました。深謝申し上げます。(森 邦博)